

「みんなで生きる～賀川豊彦とボランティア～」

明治学院大学ボランティアセンター20周年記念 加山 久夫

I はじめに

明治学院大学ボランティアセンター設立の前史として、下記のことが考えられる。

- ① 「ボランティア元年」としての阪神淡路大震災（1995年）
- ② 多数の本学学生と教職員により被災者支援活動を展開。賀川豊彦と同志たち（後述）の活動拠点であった神戸・賀川記念館の協力を得て、同記念館を活動拠点とした。
- ③ 一般教育部（教養教育センターの前身）に総合科目「ボランティアと市民社会」を学部横断的な教員の協力を得て開設、多くの受講生にボランティア活動やNPO活動への関心を促した。
- ④ 森田武理事長（当時）の提案により明治学院ボランティアセンターを創設（1998）。センターは翌1999年、明治学院大学ボランティアセンターとなった。

II 関東大震災（1923） ボランティア活動とセツルメント運動

- （1） 関東大震災直後の東京帝大生によるボランティア活動とその後の帝大セツルメント（東京市本所区）は学生によるボランティア活動として歴史に記憶されている。特に、帝大セツルメントはわが国セツルメント活動の最初であったと言われる。だが、それには同地区で支援活動を展開した賀川豊彦の働きかけがあったことを忘れてはならない。
- （2） 賀川豊彦の被災者支援活動——基督教産業青年会（東京市本所区）、信用組合、消費生協などを設立して、相互扶助による被災者支援を継続した。それらは100年後の今日まで発展的に続いてきている。

III 賀川豊彦（1888～1960）の社会運動

- （1） 明治学院神学部予科を経て神戸神学校へ
- （2） 神戸貧民街に移住（1909年12月24日、賀川21歳）、救霊・救貧活動を開始し、関東大震災までの13年半をボランティア仲間とともに活動を継続した。
それは、小規模であるが、先駆的なセツルメント活動（賀川によれば、「よき隣人としての人格的交流運動」）であった。
- （3） 防貧運動としての労働組合、農民組合、協同組合などの社会運動へ転換。貧困や貧富格差の問題を解決するために社会を構造的に改造する必要を訴えた。
- （4） 賀川豊彦のライフワークとしての協同組合運動——「万民は一人のために 一人は万民のために」（All for one, one for all）、「愛と協同」を理念として掲げ、賀川はつぎのような組合の設立に関わった。
 - ・購買組合共益社（1919）
 - ・神戸消費組合（1920）（現・コープこうべ）
 - ・灘消費組合（1921）（現・コープこうべ）

- ・東京学生消費組合（1926）（現・大学生協）吉野作造らと共に
- ・江東消費組合（1927）
- ・中ノ郷質庫信用金庫（現・中ノ郷信用組合）
- ・東京医療利用購買組合（1932）（現・中野総合病院）新渡戸稲造らと共に（医療生協に発展）
- ・日本協同組合同盟（1945）（初代会長）
- ・日本生活協同組合連合会（1948）（初代会長）

IV 明治学院大学のモットー “Do for Others”

- (1) 「他者」とはだれか？「隣人」とはだれか？「みんな」とは？

それは、やや抽象的な表現になるが、開かれた人格的交流をもとめる、社会的インクルージョンの思想である。

- (2) 「ヘボン→賀川豊彦→ボランティアセンター」

ヘボン博士は宣教医としてキリスト教の精神にもとづいて日本の教育、文化、福祉に貢献した。他の多くの初期宣教師らも同じ精神に立ち、日本の近代化に多大の貢献をしたことを忘れてはならない。本学はその思想的・精神的伝統を大切にしたい。

賀川豊彦は明治学院の初期に2年間在籍したにすぎないが、明治学院をこよなく愛し、終生、ことに戦後、理事、特任教授として本学に貢献した。本学社会学部設立や明治学院生協の創設の背後に賀川の寄与があったことを記憶したい。

賀川は社会運動家として実践の人であるとともに、常に、相愛互助の社会的プログラムを相次いで構想する社会思想家であった。特に、彼の協同組合主義（アソシエーションイズム）はこれからも重要なテーマでありつづけるであろう。

ちなみに、森田理事長は、学生時代、賀川豊彦の講演活動でのボランティアとして協力し、賀川から少なからず影響を受けていたこともあり、明治学院と関わることになった喜びをしばしば語っていた。

- (3) 大学におけるボランティアセンターの意義

災害被災者、障がい者、病者、老人、貧しい人々、外国人などとの交流や支援の体験は、その人の学業や人生に寄与する知的、精神的財産になりうるものである。また、問題を共感的に理解し、解決するための学際的、総合的な知的関心や視野を拡大する動機となると思う。

大学におけるボランティアセンターは、そこに集う多くの学生たちへの社会実践の情報の発信や機会の提供をするとともに、さまざまな学問分野への橋渡しの役割も担っているのではないか。

- (4) キリスト教人格教育は明治学院の基本理念であり、キリスト教はヘボンや賀川らの精神的基盤であった。たとえば、ヘボン研究や賀川研究をとおして、本学のキリスト教主義に相応

しいキリスト教理解への示唆を得ることができるのではないか。

“Do for Others” は、聖書に示されている「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」というイエスの言葉に依拠するものであることを想起したいと思う。